

社長所感（3月）

地方振興が叫ばれて久しくなりました。

古くは、戦前の原敬の政友会内閣の「我田引鉄」騒動、戦後の「新産・工特」指定運動、田中首相の日本列島改造論、平成になっての「ふるさと創生」、「構造改革特区」の指定、最近の「地方創生」など百花繚乱の感があります。

ちなみに、同じ創生ですが、「ふるさと創生」は、一律に1億円という「金を出すので、知恵を出せ」という手法で、「地方創生」は、自治体が地域振興のための「知恵を出したら、金を出す」という手法で、少し考え方に違いがあります。

その地域振興の成功例として、石破地域創生相は、地元の鳥取に近い島根の隠岐の島の海士町の話をよくされます。

人口減、高齢化、財政難に苦しんでいた海士町が新商品の開発などにより、経済が活気を取り戻しIターン者の多い島として有名になるまでの成功のポイントは

(1) 守りの戦略---町長以下職員全体での自主的な給与カットなどの行財政改革

(2) 攻めの戦略---鮎、栄螺カレーなど島のブランド創出、「商品開発研修生」制度

を、「町民と行政の信頼を醸成し、手法と順序を間違えない」という視点から、行政が率先垂範して(1)守りの戦略を実践し、浮かした財源で、海産物の鮮度を保つCASシステムを導入するなど(2)攻めの戦略に進んでいったことによるものです。

このように、守りがあってこそその攻めなのですが、マスコミなどの取り上げ方を見ても、攻撃の華々しさに目を奪われ、守備の報道がないがしろになりがちです。

先月、お話ししたアメリカン・フットボールにも、

“Offense sells tickets, but defense wins championships. (華々しい攻撃でチケットは売れるが、実際に勝敗を決するのは地味な守備である。)”という格言があり、先月7日に行われた第50回スーパー・ボウルも、その格言通りの展開となりました。

戦前、走れるQBキャブ・ニュートンを擁し、攻撃力No1のカロライナ・パンサーズが大差で勝利するとの予想が大半でしたが、ふたを開けてみると、ディフェンス陣が踏ん張ったデンバー・ブロンコスがトロフィを獲得しました。

守備陣が鉄壁の守りで、試合のリズムを作り、攻撃陣がそれに応えて積極的に攻撃して点を取るという展開で、守備の大切さを再認識した試合でした。

同様に、日常生活や企業活動における守備（例えば、不注意な怪我や病気をしない、ケアレスミスや法令違反をしないといったようなこと）も、大変に重要で、これがあってこそ、華々しい活躍や積極的な事業展開が可能になると思われます。

この守備の更に後詰めの守りが、保険の役割とっており、しっかりとその務めを果たしていきたいと考えています。